
Catch the eye 2017年6月

2017/6/1
(木)

『皮膚は考
える』

風薫る清々しい季節はほんのわずかだった感。ここ数日暑い、今日も暑い。朝晩はまだ風がつめたいのが救い。はや6月、今年の梅雨入りはいつになるかしら。

『今この本を読んでいる…』とバックから取り出した単行本の厚いこと、ぶ厚いこと。昨夜の「女性チャレンジ応援拠点」でのこと。読む人は読んでいると感心。荷物が重くなるはずだけど、知的好奇心を持ち歩く、いつも意識する、瞬間でその世界に入る。「岡潔」は大事な論文を風呂敷にしっかり包んでいつも身につけていたような。

『あとどれくらい読めるかと思うと、寝るのも惜しい気がして…』とは、知人の熟年女性。ああ、そういう風に思うんだ。自分に全くない発想に心底感心した。本好きとはこういう人を言うのだろう。

本が好きなわけではないけど、自分への問いに答えを出そうと思う時にその可能性を秘めているのが本。ちょっと自分の頭を鍛えたい時にも本がいい。どちらの場合も、大型書店内を散策して、アンテナにひっかかるものを探す。大きな図書館もまた同様。

そういう合間に時々ユニークな本に出会う。ふと目にとまった、『皮膚は考える』（傳田光洋 岩波科学ライブラリー）。11年前の2006年3月のこと。今はどういうお立場か、著者は資生堂の研究員。皮膚には脳細胞と同じ細胞があると書いてあって、なるほど…。だから、「きれいになれ、きれいになれ」と念じましようというのも、気休めでないわけ。

この本は、本文もさることながら、「むすび」に親しみを感じた。著者の人柄がにじみ出ている。人の苦しみがわかり、真摯で、節度ある姿勢が伝わってきた。おそろしいことではあるけど、「書く」ことは、自分を映す鏡。わかっているつもり。その上で今日も書いているのです。

2017/6/8
(木)

鳥取大山から

大阪から大山へ移住して工房をひらき、かれこれ7年になる旧知の友。6月3日にショップカフェをオープンさせたという便り。「自業」史の序章から本章へ向かう下準備です。





2017/6/8
(木)

「偶然」を考え
る本

昨日は一日雨だった。この機を逃してはと気象庁から梅雨入り宣言。いよいよこの季節がやってきた。夏本番は一ヶ月先だけど、21日にはもう夏至。ちなみに旧暦では今年は閏5月あり。

ドライフルーツで花束?! そういうのがあるんだと先日初めて知った。人それぞれにいろいろな人生のテーマに出会うものだとあらためて感心する。これも仕事の役得。

今朝は旧知の友からメールが届いた。大阪から大山へ移住して工房をひらきかれこれ7年、新しい展開を始めたと知らせてくれた。本人自身、人生がこういう展開になろうとは思っていなかったのではないかな。

特に独立して仕事をしていくと、〈出会い〉の不思議さを思うことになる。時間がすぎると、特にそれを感じる。そういうことになって、〈偶然性〉をうたう本には自然と目がいく。

最初に読んだのは『偶然性と運命』（木田元 岩波新書）で、もう15、6年前。世の大家たちも同じようにその不思議さを考えていたのかとちょっと安心した。そして偶然は自分が創るのだとも感じたのだった。

けっこう長く読まれている本として新聞で紹介されていて、タイトルにそそられたのが、『偶然とは何か 北欧神話で読む現代数学理論全6章』（イーウェル・エクランド 創元社）、5年前のこと。

数学者ばかりをとりあげた番組がずいぶん前にあって、科学者の中でも数学者が一番ユニークと言っていた。たしかにそう思った。哲学的なアプローチとは違って、言い切るところが清々しい。

昨年11月の新聞コラムで知った『「偶然」と「運」の科学』（マイケル・ブルックス編 SB Creative）は、この4月に読んだ。科学者たちのコラムが集約されている。知っておくと考えの助けになることも多い。

文理両系で同じテーマを読む、考える。これはなかなか有益。テーマを狭いところにおさめず、広々とした野に出て考えられている気がする。そして行きつく考えは、やはり自分しだい。

自分が動くこと。そうすると必ず何かに合う、会う。それに何かを感じて、感じたことに応じて意味づけして、そして次に何かをするまたはしない。動くにしても、いつもと違う動きが大事だと、本を読んで再認識。

2017/6/10
(土)

a la main

アートなコミュニティーサロン『a la main』さんのMILAN BAZZAR vol. 1 へ出かけた。MILANとはネパール語で「粋」という意味だそうな。8日に便りが届いた『tree frog』さん同様、自分ならではの後半生を彩り始めた熟女子たちの「青春」の動きをみる思い。



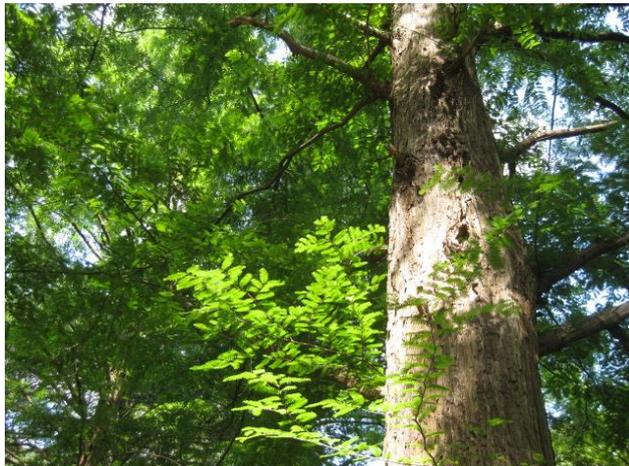
<http://www.facebook.com/alamainjp/>



2017/6/13
(火)

うつぼ公園

梅雨入りして一週間、7日以降ずっとよいお天気で、乾燥注意報が出るほどのさわやかさ。今のうち、今のうち、急かされるように「うつぼ公園」へ寄る。アジサイも咲き始めています。



2017/6/16
(金)

空に目をむける
本

梅雨入り宣言のあと、ずっと晴れ。おまけに乾燥注意報が出るほど。昨夕などは、まるで夏が終わって秋に入り始めたような空気感と街の風景。ひょっとして今年はカラ梅雨か。

毎日のちょっとした出来事を記録できるように月間の「デイリーメモ」のフォームを作っている。今朝一番事務所に着いた時間をいれて後は追って書き入れるのだけど、ふと来週の「夏至」が目に入り、“あら、日をまちがっている”。21日なのに、22日になっていた。韓国のカレンダーをみて書き入れたからだった。

二十四節気の計算には2つあると『こよみのページ』が教えてくれる。定気法では6月21日、恒気法では6月22日。二十四節気は太陽をもとに、旧暦は月をもとにした暦だが、「時間治療学」という医療の研究分野があるぐらいだから、太陽や月、気象を気にしておくだけで、プラスあり。なんとなく気分が晴れない時などは、天気の子にしたりして。

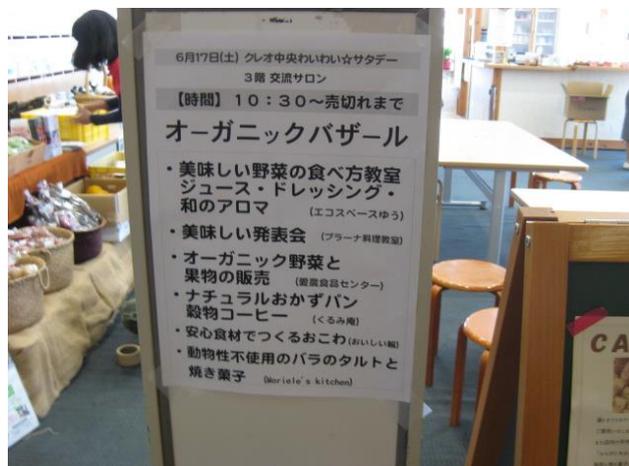
『月からのシグナル』（根本順吉 ちくまプリマーブックス）はそんなあれこれを話をしてくれる。気象予報管として有名な人だけど、グローバルに気象のことを考えたいと本をまとめたという。東洋医学では満月の夜に鍼は打たないというのが常識だったとか、干潮に人は息をひきとるとか、側で話をしてもらっているような本。

『宇宙は本当にひとつなのか 最新宇宙論入門』（村山齊 ブルーバックス）はよく売れた本だと思う。冒頭のところで、宇宙のことでわかっているのはほんの4～5%というのが象徴的。個人的に、この4～5%というのは人間の活動ないろんなケースに当てはまるのではないかと感じている、一つの法則かもしれない。

ともあれ、宇宙からみれば点にもならない人間個人ながら、けっしてそこからはみ出して生きることができないので、時に宇宙を感じて、季節を感じて、日々暮らすと、よい気がいただけそうです。

2017/6/17 クレオ大阪中央
(土) 館

10時半から4階の「女性チャレンジ応援拠点」でミニサロン。この日は「私のおすすめ本 もりより会」。館内3階と4階では、「わいわいサタデー」。オーガニック野菜や加工品の販売は塾メン手作りお弁当の販売などがありました。



中央館3階は図書館とカフェがあり、ここでバザール。天井は吹き抜け、4階から見るとこんな感じ。



4階エレベータ前には6月19日日経夕刊の記事にもなった『痴漢防止バッチ』をひろめる一般社団法人痴漢防止活動センターのブース。顔写真OKとのことで、アップ。ひよんなことからこの活動をするようになったそうですが、社会的インパクトが大きい活動です。電車通学するようになる前に先生から生徒へ、親から子へちゃんと情報伝達をするべきだというお話しが印象的。たしかに痴漢注意やその場の対処法など、だれもあまり前もって教えていませんね。



<http://scb.jp.org/>

入口からみた「女性チャレンジ応援拠点」内部。ミニサロン、事前の申し込みは少なかったけど、当日参加の人が徐々に訪れ、結局定員の人数に。わたしからは「堀田善衛」を紹介。一冊の本というよりも、この作家の知性と感性が今の時代に響くものがあると考えて。そんなことを話し終えて、司会の方が「何か質問などは…」を他のみなさんへうながした時、お一人が、「今日は来てよかったです。学生時代に友だちに勧められ、読みました。すごく感動したことが、今、まざまざと思い出して、本当に来てよかったです」。こちらこそ、「堀田善衛」を知っている人がいて、うれしかった。いつもは、だいたい、「知らないですね」を返されるばかりですから。



2017/6/22 花に親しむ本
(木)

一昨夜から昨夕にかけてよく降った。雨があがり昨夜からまた少し気温が低い。ただし太陽がのぞき始めたから、これから暑くなるはず。昨日は夏至、今年も半年すぎて、半年後の冬至もまたすぐ来る。

すぐ来るといえば来週土曜はもう7月。7月といえば、「象鼻杯」が頭に浮かぶ。蓮の大きな葉を杯に茎の中をつたってくる酒を呑む。象が声を張り上げた時の姿のように、頭を上に向けて。

こんな風流な愉しみがあるのかと本を手元に引き寄せたのは、『花を旅する』（栗田勇 岩波新書）。古い蓮の品種の話からそれをもとめて出かけた新潟県の山の深いところでその催しが行われている。

想像するだけで、優雅な気分になり、神秘的な雰囲気が出た。一度経験したいものだと思っていたら、京都や大阪でもやっていた、少し風情にはかけるけど。宇治の三室戸寺、大阪なら万博公園。

花の本は、『京都 花の道をあらく』（松本章男 集英社新書）の方が先に読んだ。この本にも蓮の項はあるけど、「象鼻杯」にはふれていない。紙面に限りがあったのか、全体の統一感を考えてのことか。

この2冊も読んだのは15、6年前。茶道は日常の中に宇宙を感じる間をもつものというが、自然に親しむのもまたそうだとこの2冊からならった気がする。日常に追われてもすぐにくわれにかえる>よい方法。

